

2023年度 大学入学共通テスト 世界史Bの分析

世界史

学校法人 河合塾 世界史講師 井上 徳子

1 はじめに

2023年の共通テスト世界史B本試の平均点58.43点は、昨年の65.83点から7.4点下がった。センター試験時代を入れると2003年の56.53点並の低得点であり、地歴B科目の中で一番低かった（日本史B 59.75、地理B 60.46）。

2 概略

分量：大問5題、小問34問は、共通テスト元年の2021年や昨年2022年と同じ。ただし、問題のページ数が増加しただけでなく、会話文や資料を読み取る問題が増加したため、分量は全体として増加しており、解けども解けども先が見えない分量は、受験生にとって負担だっただろう。

時代：前近代史からの出題が多く、古代史からの出題が増加した。例年正答率が低い第二次世界大戦後からの出題が減少し、戦後のみを扱う小問はなく、選択肢の一部として出てくるのみであった（のBRICS(BRICs)、のキング牧師）。

地域：アジア・アフリカ史と欧米史の比率はほぼ同じだったが、アフリカ史やオセアニア史からの出題はほとんどなく、中国史・イスラーム史・東南アジア史からの出題がめだった。

分野：例年通り政治史中心だが、第5問が社会経済史中心だったことから、社会経済史からの出題が増加した。文化史では中国文化史が多かった。

形式：大問5題中4題、計6か所で文字史料が利用されており、文字史料がない1題も、表・グラフの読み取りが必要である。会話文は大問5題すべてで使用されており、計10か所という会話場面数は、昨年の5か所の倍にあたる。地図問題は1問で、昨年の3問から減少した。図版は3か所で使われたが、すべて解答に直接関係なく、試行調査のような図版選択問題はなかった。また、空欄

補充問題は単語を入れる空欄が激減して文を入れる空欄が増加した。単語を入れる空欄の場合は、空欄に入る用語と関連情報の組み合わせ問題になっていたり、空欄に入る用語についての4文正誤判定問題（次頁の例題2がその一例）とするなど、単純な空欄補充問題にならないよう工夫されている。資料の読み取りと既得の知識を組み合わせて総合的に判断する4文正誤判定問題、できごとの背景や結果、変化を問う問題も増加した。

3 正答率が低かった問題

■例題1 2023年度共通テスト本試：第1問 問5

山口：（前略）女性が活発な状況が現れた背景は、いったい何でしょうか。

藤田：著者の推測に基づくなら、に由来すると考えられます。

中村：あっ！ ひょっとして、この時代の北方の状況が、中国に女性皇帝が出現する背景となったのでしょうか。

教授：中村さんがそのように考える根拠は何ですか。

中村：ええと、それはからです。

教授：ほう、よく知っていますね。

（後略）

問5 文章中の空欄に入れる文として最も適当なものを、次の①～④のうちから一つ選べ。

- ① 唐を建てた一族が、北朝の出身であった
- ② 唐で、政治の担い手が、古い家柄の貴族から科挙官僚へ移った
- ③ 隋の大運河の完成によって、江南が華北に結び付けられた
- ④ 北魏で、都が洛陽へと移され、漢化政策が実施された

「この時代の北方の状況が、中国に女性皇帝が出現す

る背景となった」と考える根拠を問う問題で、河合塾が集めたデータで、受験生全体および現役生で一番正答率が低かった問題である。正解①の選択者が一番多かったとはいえ、③④の選択者がそれぞれ約4分の1を占めた。「この時代」、つまり資料(6世紀後半)の筆者顔之推が見た分裂時代の「北方の状況」と、中国の女性皇帝、つまり則天武後の出現とのつながりを、短文を読んで判断する必要があるが、その際に注目しなければいけないのは、中村さんの根拠が、中国で「女性が活発な状況が現れた背景」が「イ」に由来するという藤田さんの考えの影響下にあることであり(実際の会話では、前の発言をふまえず発言することはあるが、今回は、「あっ!ひょっとして」と前の発言を受けていることを明確に示す文言がある)、問4で「イ」を「北魏を建国した鮮卑の風習」と正しく答えないと、問5でも正解できないというように、問4と問5は連動していた。問4で④「隋による南北統一」を選んだ者は問5で③を選ぶだろう。ただ、大運河の完成による江南と華北の結びつきと女性皇帝の出現は因果関係がおかしい。また、問4で正解できたのに問5で④を選択した者は、漢化政策(鮮卑の風習の禁止)と女性皇帝の出現(鮮卑の風習に由来する現象)は矛盾していることに気づく必要があった。帝国書院『新詳世界史B』(以下、教科書)は、本文で拓跋国家についての説明があり(p.65)、教科書に基づく学習をしていた受験生には有利な問題だった。

4 得点差がついた問題

■例題2 2023年度共通テスト本試：第4問 問4

文章中の空欄「ウ」の戦争について述べた文として最も適当なものを、次の①～④のうちから一つ選べ。

24

- ① イオニア地方のギリシア人の反乱が、この戦争のきっかけとなった。
- ② この戦争でギリシア人と戦った王朝は、エフタルを滅ぼした。
- ③ この戦争の後に、アテネを盟主としてコリントス同盟(ヘラス同盟)が結成された。
- ④ ギリシア軍が、この戦争中にプラタイアイの戦いで敗北した。

河合塾が集めたデータで現役生と高卒生で一番差がついた問題で、会話文から「ウ」がペルシア戦争だと読

み取ったうえでの正誤判定問題である。誤文③の選択者が高卒生で非常に少ない一方、現役生では約4分の1にのぼった。「ウ」の直前に「マラトンの戦い」があることなどから「ウ」の特定は容易であり、ペルシア戦争のきっかけが「イオニア植民市の反乱」であることはおそらく学ぶであろうから、正解の①が選択できなかった理由は、「イオニア植民市の反乱」がギリシア人の反乱だという内容の理解ができていなかったことにあるだろう。

5 現役生の弱点

今回、現役生の正答率が低かった問題の一つ、第1問 問1で、「①ピョートル1世が、北方戦争でイギリスを破った。」の選択者が現役生で多かったことも、現役生は用語は知っていても、北方戦争についての内容理解が伴っていないことを示している。

このほか、現役生の正答率が低かった問題は、**時期に関わる問題**である。第1問 問3ではそもそも19世紀にイギリス自治領だったのはカナダのみであること、第4問 問7の時代配列問題ではグレゴリウス1世の時代がわかっていなかった。そして、例年のことだが**文化史に関わる問題**も正答率が低く、例えば、歴史家とその作品名との組み合わせ、その作品が扱う内容などを問う第4問 問5の正答率が低かった。

結局、世界史の正確な知識の有無で点差がついている。正確な知識には、できごとの内容、因果関係、背景、影響、時期なども含まれる。したがって単語の暗記に終始するのではなく、教科書を丁寧に理解する学習が必要である。なお、今回出題が少なかった第二次世界大戦後史は来年以降、要注意である。

6 展望

今回、平均点が伸び悩んだ理由として考えられることは、資料や会話文の読み取りが多く、しかも空欄や下線部の前後だけを参考にすればよい問題ではないこと、用語そのものではなく内容を問う出題が多かったことである。昨年11月に公表された共通テスト『歴史総合、世界史探究』の試作問題も、この共通テストの方向性の延長線上にあった。本試の問題を解くだけではなく、模試の活用などを通じて、問題演習量を積極的に確保し、形式に慣れる必要がある。そして、さまざまな事象の横のつながりや縦の流れを意識した、教科書を徹底的に活用した学習が必要である。